

# 小学校外国語科（英語）における意欲を高める授業づくり

## ー 学習に対する児童のニーズを重視した指導の視点から ー

学習開発分野（19220904）奥 山 智 晶

授業者が児童の実態を把握することは、児童のより良い学習を促進させる。本研究では児童の実態、その中でも学習者のニーズを踏まえながら学習教材や授業を検討することを目的とする。そのために、まず、先行研究から児童のニーズの必要性を明らかにし、次に教職専門実習Ⅱにおいてアンケート調査を実施し、ニーズの整理を行った。さらに、整理して明らかになった児童の特徴をもとにタイプ別に再整理することを通してニーズを重視した指導の可能性を検討し、実践に向けての課題を明らかにした。

[キーワード] 小学校英語, 授業づくり, 児童理解, 学習者ニーズ

### 1 はじめに

#### (1)問題の所在と背景

次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ(2016)では、学習指導要領(2008)において指導改善による成果は認められるものの、児童生徒の学習意欲に関わる課題があると述べている。今井(2018)は、2020年度から検定教科書を使用した外国語科が始まるが、児童らの英語体験学習の量や質も毎年変化するため、児童の力量を把握して授業内容や方法の変更や改善が必要だと論じている。小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編(2018)では、児童や学校の実態に応じて多様な学習活動を組み合わせて授業を組み立てることが重要であり、基礎となる知識及び技能の確実な習得を図ることが必要であると述べている。以上の記述から、学習の基礎となる知識及び技能の確実な習得のためには、学習に対する意欲を高める工夫が必要であり、そのために学習者の実態、特に学習者自身の願いや求めを取り入れた指導が必要ではないかと考えられる。つまり、教師は、児童一人ひとりのニーズを把握し「学習を通してどのような姿になりたいのか」という児童の実態を理解した上で、学習活動を組み立てていくことが必要である。したがって、これまでのような一斉授業ではなく、児童個々の実態に応じた指導が有効ではないかと考える。

#### (2)研究の目的と方法

黒田(2011)は、教育者の視点だけではなく、児童が抱く疑問から児童の関心を明らかにすることが英語教育にとって重要であり、英語を学ぶこと

が児童にとってどのように意味があるのか、英語を通して何を学んだのかを明らかにする必要があると述べている。

この黒田の論を踏まえ、本研究では、児童の実態や興味・関心を生かした授業を行うために児童の英語学習に対するニーズに焦点を当て、そのニーズに応じた指導の在り方について検討することを目的とする。

そのために、以下の取り組みを行う。第1に、先行研究の理論検討を行い、児童のニーズの必要性を明らかにする。第2に、教職実践実習Ⅱにおいて行ったアンケート調査を実施し、ニーズの整理を行う。整理して明らかになった児童の特徴をもとにタイプ別に分類し、その傾向を把握する。第3に、アンケート結果から筆者による考察を行う。学習に対する児童のニーズを重視した指導の可能性と実践に向けての課題を明らかにする。

### 2 先行研究の検討

#### (1)ニーズについて

国際交流基金(2006)は、『ニーズ』とは、学習の目的、到達目標、どのような日本語が必要なのかといった問題に関係する項目であると主張している。また、学習者のニーズを知ることは適切な学習内容と教授方法を定めるうえで重要な要素となっているとも述べており、その必要性を論じている。また、舘岡(2005)は「学習者にとって必要な日本語(ニーズ)を明らかにするための調査を『ニーズ調査』と呼び、その調査に基づいて実際のニーズを明らかにする過程を『ニーズ分析

(needs analysis)』』であるとしている。「英語教育用語辞典」白畑ほか(2009)のneeds analysis(ニーズ分析)の項目では、「学習者が将来どのような目的や状況で外国語を使うようになるのかを予測し、それをもとにどのような言語能力を伸ばす必要があるのかを分析すること」と定義されている。阿濱ほか(2018)はニーズ分析を、「学習者自身が何を学びたいか、また、既知知識、これまでの学習経験や教育歴に照らし合わせ、どのような学びを要求しているのかを学習者情報を把握し、分析すること」と論じている。

本研究ではニーズを「学習者自身が何を学びたいか、また、既知知識、これまでの学習経験や教育歴に照らし合わせ、どのような学びを要求しているのか」と捉えることとする。

## (2) 学習意欲に影響を与える要因

ケラー(2010)は学習意欲を4つに分類している。①注意(Attention)は、学習者の関心を獲得すること、学ぶ好奇心を刺激することである。②関連性(Relevance)は、学習者の肯定的な態度に作用する個人的なニーズやゴールを満たすものである。③自信(Confidence)は、学習者が成功できること、成功は自分たちの工夫次第であることを確信・実感するための助けをすることにより生まれるものである。④満足(Satisfaction)は、(内的と外的)報奨によって学習者の達成感が強化されることである。これらの中でも、本研究で重視しているニーズと特に関わりが深いものは、②関連性であると考え。最も一般的な意味での関連性を、ケラーは「人々のニーズを満たし、目標達成を含む個人的な願望を達成する助けとなるとみなすことを指す」と述べている。彼は関連性を更に3つに下位分類している。(ア)目的志向性とは、学習者のニーズを満たすこと、授業内容の価値を示すこととしている。(イ)動機的一致とは、学習者個々の興味を取り入れることとしている。(ウ)親しみやすさとは、学習者に馴染みのある授業内容にすることとしている。そして、これらの記述は、学習者のニーズを取り入れることや授業内容の価値を示すことが、学習者の意欲を決定づける強力な要素になることを示唆している。さらに、国際交流基金(2006)は、学習者の日本語教育への「動機」や「学習意欲」の把握とそれらを引き出す手段を知る手掛かりになると述べ、その重要性を示唆している。日本語教育に関する記述ではあるが、言

語習得の観点において、英語教育についても同様のことが言えるのではないかと考えられる。

## 3 アンケート調査とその結果

### (1) 調査の目的と方法

外国語学習に関する問題点として、黒田(2011)は、児童に関してはアンケートで英語活動に対する意識が調査されるのみであったと述べている。そこで、英語学習に対する児童のニーズを調べ、その結果から指導の在り方を考察することを目的とし、教職専門実習Ⅱにおいて山形市内のA小学校第5学年を対象にアンケート調査を行った。調査項目を表1に示すこととする。なお本稿では各項目の選択肢は省略する。

### (2) 対象となる学校及び児童の概要

時期：2019年11月中旬(教職専門実習Ⅱ)

対象：山形市内A小学校第5学年児童77名

学校は、病院や郊外型の商業施設が隣接する住宅街に位置する。また、A小学校では学習指導要領(2018)が来年度に全面実施されることを見越し、段階的に先行実施している。5学年の児童は、2018年度に外国語活動、2019年度に教科としての外国語を経験している。

### (3) アンケートの概要

調査では、児童の英語に関わる経験、今後の英語学習においてやってみたいこと、4技能等の資質・能力に関する得意度、自分への希望・期待として間接的に苦手項目などを尋ねた。項目の作成にあたり、ベネッセ教育総合研究所が実施した調査項目<sup>1)</sup>を参考にした。また、4技能に関する項目の作成には、鶴岡版CAN-DOリスト<sup>2)</sup>を参照した。

表1 実施したアンケート項目

質問内容	
1	学校の授業以外で、英語や英会話の勉強をしていますか
1-1	どのような教室や教材で、英語に関係する勉強をしていますか
2	普段の生活の中で、英語に関わることはどれくらいありますか
3	これまでに海外旅行をしたことはありますか
3-1	どのような国や地域に行きましたか
4	学校での英語の授業や活動は好きですか(理由も)
5	学校での英語の授業や活動が得意ですか、苦手ですか
6	学校での英語の授業や活動の中で、どのようなことが得意ですか(複数選択)
7	学校での英語の授業や活動の中で、もっとできるようになりたいことは何ですか(複数選択)
8	学校での英語の授業や活動の内容をどれくらい理解していますか
9	学校での英語の授業や活動で、好きな活動は何ですか(複数選択)
10	学校での英語の授業や活動で、やってみたいことは何ですか(複数選択)
11	学校での英語の授業や活動の感想を自由に書いてください

### ① 児童の実態について

ここでは、「アンケート項目1, 4, 5」の3項目を利用した。表2のような分類表を作成し、(a)～(h)の8つのタイプに分類した。Q1.では、質問紙の回答において「1:好きではない」「2:あまり好き

ではない」を選択している児童は×,「3. まあまあ好き」「4. 好き」を選択している児童は○として示している。Q2. では, 学校外での英語に関わる学習経験についての有無を示している。Q3. では, 質問紙の回答において「1. 苦手」「2. やや苦手」を選択している児童は×,「3. やや得意」「4. 得意」を選択している児童は○として示している。表 3 はタイプごとに分類した児童の人数を示している。5 学年全体では, (a), (d), (h) タイプの児童が多く存在している。(a) タイプは, 英語学習が好きで学校外での英語に関わる学習経験もあり, 英語学習が得意であると考えている児童である。(d) タイプは, 英語学習は好きだが, 学校外で英語に関わる経験が希薄で, 英語学習は苦手であると考えている児童である。(h) タイプは, 英語学習が好きではなく, 学校外での英語に関わる経験も希薄であり, 英語学習に対して苦手意識をもっている児童である。また, 他のタイプにも児童は分散しており, 様々なタイプの児童が学年に存在していることが明らかになった。

表 2 タイプ別分類表

児童の分類	Q1. 好き	Q2. 学習経験	Q3. 得意
(a)	○	○	○
(b)	○	×	○
(c)	○	○	×
(d)	○	×	×
(e)	×	○	○
(f)	×	×	○
(g)	×	○	×
(h)	×	×	×

表 3 分類結果

児童の分類	5 学年
(a)	15
(b)	8
(c)	4
(d)	17
(e)	5
(f)	2
(g)	6
(h)	15
合計(人数)	72

#### ②4 技能の習得について

表 4 では, 「アンケート項目 7」を利用した。英語学習を進めていく上で, 自分への希望・期待を含む「もっとできるようになりたいこと」として, 複数回答の形式で間接的に苦手項目を尋ねた。5 学年全体では, 「聞く」「話す」が同率の 64% となった。また, 「書く」を選択している児童が学年全体の 71% と最も高い割合になっていた。

#### ③児童が求める学習活動について

表 5 では, 「アンケート項目 10」を利用した。選択項目が複数あるため, 一部の結果のみの掲載とし, 上位 3 つの活動について示すこととする。「英語を使ってゲームをすること」を 57% の児童が選択していた。また, 筆者の予想に反して「アルファベットや英語の言葉を書くこと」を 2 番目に多くの児童が選択していた。

表 4 4 技能の習得

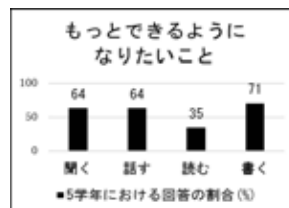
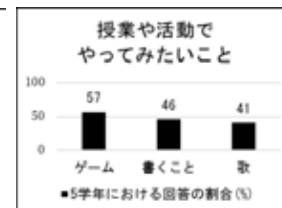


表 5 児童が求める活動



## 4 考察

筆者による児童のニーズ分析の結果を踏まえて, ニーズを重視した指導の可能性について考察する。

### (1) 「①児童の実態について」の考察

表 2, 表 3 で示したように, 様々な学習経験や学習者背景があることが明らかになった。(a) タイプのように自分から積極的に活動へ参加できる, 英語学習への意欲が高い児童がいる一方, (e), (f), (g), (h) のように小学校 5 年生の段階で既に英語学習に対して苦手意識をもっている児童らも存在する。特に, (h) のように英語学習において基本的且つ丁寧な指導を必要とする児童も存在する。これらのことから, 小学校段階であっても英語学習において児童には意欲や得意不得意の差があり, 教師の関わり方が重要だと考えられる。教師の関わり方について, 長谷川(2005)では, 「教師が生徒のつぶやきを聞くことのできる距離」で生徒に語りかけ, 生徒一人一人を大切に学習支援をすることが何よりも大切であると, 「少人数指導による習熟度別学習」の効果について述べている。この長谷川の論を踏まえると, 少人数グループを編成し複数の教師によって可能な限り児童の実態に合わせた指導を行うことの可能性についても検討の余地がある。

### (2) 「②4 技能の習得について」の考察

表 4 で示したように「聞く」「話す」を選択している児童が同率で 6 割を超えていることから, これまでの学習で重視されてきた指導が影響していると推察する。また, 「書く」を選択した児童が 7 割を超えていることから, 英語を「書く」ことへの抵抗感が少なく, 興味・関心が高いことが伺える。実習Ⅱの授業観察においては, 類似している形や音のアルファベットごとに指導している場面があった。文字の形の特徴を捉えて指導するなどの工夫が, 表 4 の「書く」ことへの興味・関心の高さに結びついた要因の一つではないかと推察する。したがって, 外国語の授業実践において, 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表

現を書き写すといった「書く」活動を取り入れることも考えられる。児童の積極的に書こうとする思いを尊重し、中学校との接続を意識した段階的な指導にも繋がるであろう。

### (3)「③児童が求める学習活動について」の考察

表5で示したように、これまで慣れ親しんできた楽しさを内含するゲーム要素を生かした活動を選ぶ傾向がある。この傾向より、表4の結果と同様に書くことへの児童の意欲が高いことから、ゲームなどと組み合わせて「書く」活動を扱うことは、児童の学習意欲の向上に繋がるのではないかと言える。一方で、ただ楽しいだけでなく、表4で示した4技能の基礎的な技能の確実な習得に繋がる内容となることが重要であると考えられる。

## 5 おわりに

本研究では、先行研究の検討とアンケート調査の分析・考察より、児童の特徴をもとに8つのタイプに整理し、4技能の習得や児童が求める学習活動について明らかにすることができた。しかしながら、本研究で検討した児童のニーズを基にした指導の在り方が英語学習に対する児童の意欲の向上に影響するのかが検証できていないため、次年度の実習で実践を行っていく必要がある。また、少人数指導や、個に応じた指導を具体的に整理する必要がある。そのため、先行研究の検討と授業実践の2つの観点から、児童のニーズを重視した指導の有効性について明らかにしていきたい。

## 注

1)「外国語活動」の成果と課題や、保護者の英語や外国に対する意識や英語の学習観を明らかにすることを目的に、全国の小学5、6年生とその保護者を対象に2015年3月に実施された調査。  
ベネッセ教育総合研究所(2015)「小学生の英語に関する調査」、<https://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4760>(最終閲覧日2019年12月3日)

2)山形県教育委員会が、第6次山形県教育振興計画と連動して英語教育の一層の強化・改善を図るため、平成27年度から山形県「英語教育改善プラン」を実施した中の、鶴岡市をモデル地区とした山形県「小中高大連携プログラム」において鶴岡市が独自に作成したもの。

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa)

/shotou/123/shiryo/\_icsFiles/afieldfile/2017/02/07/1381875\_6\_1.pdf(最終閲覧日2020年1月29)

## 引用文献

阿濱志保里・阿濱茂樹・霜川正幸(2018)「学習者ニーズに関する基礎的研究」、『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』、第45号、121-127.

長谷川等(2005)『『確かな学力』の育成を目指した少人数指導による習熟度別学習[外国語]』、『初等教育資料』、ぎょうせい、第830号、40-45.

今井裕之(2018)「2019年度以降の小学校英語の課題への取り組み」、『平成30年度三重の英語教育改革加速事業モデル校実践事例集』、<http://www.pref.mie.lg.jp/GAKOKYO/HP/p0014200018.htm>(最終閲覧日:2019年12月3日)

ケラーJ.M. 鈴木克明(訳)(2010)『学習意欲をデザインする-ARCSモデルによるインストラクションデザイン-』、北大路書房.

国際交流基金(2006)『日本語教授法シリーズ第1巻「日本語教師の役割/コースデザイン」』、ひつじ書房.

黒田真由美(2011)「小学校英語が直面する課題とは? :これまでの議論の展開と新たな課題」、『教育方法の探究』、第14号、9-16.

文部科学省(2016)「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ報告」、[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021\\_1\\_5.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_1_5.pdf)(最終閲覧日2019年12月3日)

文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説外国語活動・外国語編』、開隆堂.

白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則(2009)『英語教育用語辞典』、大修館書店.

館岡洋子(2005)「コースデザイン」、『東海大学留学生教育センター(編)、『日本語教育法概論』、東海大学出版会、pp. 57-70.

*Enhancing Children's Motivation Through Lesson Planning in Elementary School Foreign Language Departments : A Teaching Perspective That Emphasizes Children's Learning Needs*  
Chiaki OKUYAMA